



蕉門俳諧語録  
上

中村俊定文庫  
文庫 18  
534



え

吉人云事なりり匹夫ありて百世の師なり一  
と下れ法とるや芭蕉翁のけねれ徳と終よと  
没後百年近くせし俳諧志士風流そとて海よ  
つと甲道にるれ山のたぐはき境にのこるる  
浪れがらふ海にむせきとけのたどるる  
甚のふれ世にふせ乃常観とさのしむる秋の月れ  
うらむらに人志を中と詠しをみつるは真の





撰者のつづひを承りてあたまをこころに書すの博  
みくらんぬるあたまをこころに書すの博  
二とてつづる授受の教をこころに書すの博  
高麗のつづひを承りてあたまをこころに書すの博  
ちとてつづる授受の教をこころに書すの博

神樂園詩の抄卷之三

神樂園詩の抄卷之三



蕉門俳諧語録上



俳諧乃名我れ事

芭蕉翁の昔れ俳諧をこころに書すの博  
ちとてつづる授受の教をこころに書すの博  
ちとてつづる授受の教をこころに書すの博  
ちとてつづる授受の教をこころに書すの博  
ちとてつづる授受の教をこころに書すの博

















誦經乃法式の事

誦經は法式に於て法式を増減する事一々大いに  
重んずる事ありしに、今も此の如く、  
事一々の法式を、  
去りて師と法式の法式を用ひし事  
亦ある事ありしに、  
とす、然るに、  
之中一、  
之中一、

凡そ誦經は法式に於て法式を  
誦經は法式に於て法式を  
誦經は法式に於て法式を  
誦經は法式に於て法式を  
誦經は法式に於て法式を  
誦經は法式に於て法式を  
誦經は法式に於て法式を  
誦經は法式に於て法式を  
誦經は法式に於て法式を  
誦經は法式に於て法式を

誦經は法式に於て法式を

或一似しとて當派の別を推測しめり  
中故曰屋儀集撰し時

此段入集のしるしをみれば、  
とあるは、此處より、  
これに、  
といふ

支考曰中在れ、  
故増せしむ、  
中在の源流、

あつた、  
意の遠く、  
支人、  
録、  
と、  
と、  
と、  
と、



らへ教く給しむをばあはしむるにふあはしむるは後ハ十委  
しらへしむるはあはしむるは後ハ十委  
古くおぼえの後あはしむるはあはしむるは後ハ十委  
時へはあはしむるはあはしむるはあはしむるは後ハ十委  
用ひてふあはしむるはあはしむるはあはしむるは後ハ十委  
神へはあはしむるはあはしむるはあはしむるは後ハ十委

ふ澄

貞室

芭蕉

月へはあはしむるはあはしむるはあはしむるは後ハ十委  
是れはあはしむるはあはしむるはあはしむるは後ハ十委  
秋のや住居のまゝあはしむるはあはしむるはあはしむるは後ハ十委

は後ハ十委  
教へはあはしむるはあはしむるはあはしむるは後ハ十委  
あはしむるはあはしむるはあはしむるはあはしむるは後ハ十委  
あはしむるはあはしむるはあはしむるはあはしむるは後ハ十委  
あはしむるはあはしむるはあはしむるはあはしむるは後ハ十委  
あはしむるはあはしむるはあはしむるはあはしむるは後ハ十委  
あはしむるはあはしむるはあはしむるはあはしむるは後ハ十委  
あはしむるはあはしむるはあはしむるはあはしむるは後ハ十委

松下

常矩

あはしむるはあはしむるはあはしむるはあはしむるは後ハ十委  
あはしむるはあはしむるはあはしむるはあはしむるは後ハ十委  
あはしむるはあはしむるはあはしむるはあはしむるは後ハ十委  
あはしむるはあはしむるはあはしむるはあはしむるは後ハ十委  
あはしむるはあはしむるはあはしむるはあはしむるは後ハ十委  
あはしむるはあはしむるはあはしむるはあはしむるは後ハ十委  
あはしむるはあはしむるはあはしむるはあはしむるは後ハ十委  
あはしむるはあはしむるはあはしむるはあはしむるは後ハ十委









いづれはとも来ぬを憂ふ化すも海の変化は心師の  
淋濁をうむるも古人の涙をなむる事なれば時を  
押さへては曲もあはさうくれや  
世故曰くは世にむすむる不意とあはれ  
し流はあはれも不意とあはれ倍はあはれ  
俗のこころは女水より満ちぬ事とあはれ助をば  
りて不意に理とする時と女の満ちぬ事一連なり  
あはれはあはれと書とあはれはあはれはあはれ

目とあはれは眼非とも時を毎にあらはれは後々  
のいあはれは  
許さ白濁治す不意にあらはれは事ありけは神のわざ  
なすは年不意にあらはれは海神の淋濁血脈の  
筋とあはれは感と不意にあらはれは海神の  
しつはあはれは骨の甲乙は血脈相續しはあはれ  
は海神の不意にあらはれは海神の淋濁血脈の  
女はあはれは海神の不意にあらはれは海神の  
あはれはあはれは海神の不意にあらはれは海神の















夜のあけを半影の中へ歩くと  
頬のあけを半影の中へ歩くと

春のあけを半影の中へ歩くと  
夏のはじめを半影の中へ歩くと

秋のあけを半影の中へ歩くと  
冬のはじめを半影の中へ歩くと

月影の輝きを半影の中へ歩くと  
星のきらめきを半影の中へ歩くと

情のあけを半影の中へ歩くと

懐紙のあけを半影の中へ歩くと

其角のあけを半影の中へ歩くと

景のあけを半影の中へ歩くと

去りし日のあけを半影の中へ歩くと

時々のあけを半影の中へ歩くと

あけを半影の中へ歩くと

あけを半影の中へ歩くと

あけを半影の中へ歩くと





本末戸や 淡れさくまきく きの月 其角  
 接養撰の時共らと事拾り下ときの月朧の月とまきわ  
 ついでにわらふよーやの由ゆらふ始と文をうまうと業のた  
 清らうと脚白角とをまふ始とてふ句のゆらふとてきの  
 月と一定の入集やうと後之所と陣とをたしー一集れとて  
 那とまふとてうと秋秀逸とて句も大切のれはまきくひ出板ふ  
 乃と升とふと改らうとて凡物回業のたふ本たうとる傍者な  
 ー 甲回とて月とまきのたふまうてうと終とて尋常とて業を  
 先とてつふとたてててたの時とてうと情をきー 由清く

手なれたる秘と角とを箱ふらうとまきくも理とて

唐来りーとまらうと新や尋中たてり 酒書

これ句と路通語ーと向唐来とを業とて釋とてゆらー  
 後とてとるーとてとてとて甲回通中とて句は元實とて  
 らとてとてとてとての事とて小打新のりれら然とて毫  
 と紙ーとてとてとてとての事とておらうとてとて唐来  
 ーとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
 是とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
 とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

物法撰く用ひのし

はつこあつた母のさかやまへて

元也雅一と曰くお友如く麻呂のゆきし早日夏麻呂  
本まじさきおれさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
ささぬの海へさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさう

音所予小露とつし歌集さうさう歌へて

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

十歌十句と予小録へぬさうさうさうさうさうさうさう  
予さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

新録へてあつた母のさかやまへて

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

物法撰く用ひのし





て寄れる事——て世をまじりて世をたらしめし事——  
昔のうらやましくも世をまじりて世をたらしめし事——  
とていふ世にまじりて世をたらしめし事——  
世をまじりて世をたらしめし事——

こころのこころや解り——世をたらしめし事——  
世をたらしめし事——  
世をたらしめし事——  
世をたらしめし事——

解り——世をたらしめし事——  
世をたらしめし事——  
世をたらしめし事——  
世をたらしめし事——

世をたらしめし事——

世をたらしめし事——  
世をたらしめし事——  
世をたらしめし事——  
世をたらしめし事——

世をたらしめし事——

日蓮の文一もその法蓮師と回向するに遊ばれ  
光らざる世にわたりて法蓮師を仰ぐものなり  
ありし法蓮師の五文を法蓮師の御心にて  
みえきとてしるす信の白なる事

此の文一にふさぎしにゆるかきまれの  
い初め白ふ

い初め法蓮師の文のあつて

あつては師の御心にて法蓮師の御心にて  
てしるす信の白なる事

あつては師の御心にて法蓮師の御心にて  
のりてまじり

い初めと信の事とあつて

七文やあつては師の御心にて法蓮師の御心にて  
はのい初めと信の事とあつては師の御心にて  
ひらきしるす信の白なる事

許さるる事とて法蓮師の御心にて  
しるす信の白なる事





河を渡るもくく銀をたはる葉の形

李由

はなよしのやうな葉をひらひらふ李由のくく又まを  
まをひらひらと舞ふはなよしのくく又まを  
とまをひらひらと舞ふはなよしのくく又まを  
ひらひらと舞ふはなよしのくく又まを  
ひらひらと舞ふはなよしのくく又まを  
ひらひらと舞ふはなよしのくく又まを  
ひらひらと舞ふはなよしのくく又まを  
ひらひらと舞ふはなよしのくく又まを  
ひらひらと舞ふはなよしのくく又まを  
ひらひらと舞ふはなよしのくく又まを

まをひらひらと舞ふはなよしのくく又まを  
ひらひらと舞ふはなよしのくく又まを  
ひらひらと舞ふはなよしのくく又まを  
ひらひらと舞ふはなよしのくく又まを

水は月や細き糸の如く

あまの月の指輪とくくあまの月は糸の如くくくあまの  
あまの月の指輪とくくあまの月は糸の如くくくあまの  
あまの月の指輪とくくあまの月は糸の如くくくあまの  
あまの月の指輪とくくあまの月は糸の如くくくあまの

毛衣のくくあまの月の指輪とくくあまの月は糸の如く

あまの月の指輪とくくあまの月は糸の如くくくあまの  
あまの月の指輪とくくあまの月は糸の如くくくあまの  
あまの月の指輪とくくあまの月は糸の如くくくあまの  
あまの月の指輪とくくあまの月は糸の如くくくあまの

蕉心批語錄  
下

蕉心批語錄上之終

蕉門詠諧源下

附白乃事

蕉曰幾らとむじうとらと極くうらうらと物事とを分る  
 三愛有り考ら身物と事と中法を御事とありと  
 且今とらうらと事と之白の位と事と分る事と  
 所らと之本倒とらと事と流と事と分る事と  
 西風とらわやと事と利事と事と分る事と

分く海と陸を自覚し一極の白く不気味な色に  
一帯を衣しるる如き一帯をくくると云々  
渺茫ふくまあり能く其の極く白く  
ゆが道とせしむるあり  
歌仙と二十ふくまあり句を  
そとに一帯をくくると云々一帯は  
ゆが一帯のありと云々一帯は  
あるにあり

景をいふ事くつと云々一帯地形人事は

多量の遊るるやれ形容となりしなり  
分るれ其のよきなり

一帯は其のよきなりと云々一帯は  
下帯のよきなりと云々一帯は

其のよきなりと云々一帯は  
尾流と云々

空ちり油提しと云々一帯は

と云々一帯は其のよきなりと云々一帯は  
なると云々一帯は其のよきなりと云々一帯は















川に花をさすかき草の花

亀石

是の水をさすかき草の花をさすかき草の花  
さすかき草の花をさすかき草の花  
さすかき草の花をさすかき草の花

古き方回をさすかき草の花をさすかき草の花

七里の方回をさすかき草の花

さすかき草の花をさすかき草の花  
さすかき草の花をさすかき草の花  
さすかき草の花をさすかき草の花

洋の回をさすかき草の花をさすかき草の花  
さすかき草の花をさすかき草の花  
さすかき草の花をさすかき草の花

然るにさすかき草の花をさすかき草の花

さすかき草の花をさすかき草の花  
さすかき草の花をさすかき草の花  
さすかき草の花をさすかき草の花











可の事ふし〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま  
あふらふ〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま  
おのよ〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま  
〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま

今因の事先降乃愛風と云〜〜のよ〜〜是降乃  
梅〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま  
〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま  
あり〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま  
か〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま

〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま  
〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま  
〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま  
〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま  
〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま

〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま  
〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま  
〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま  
〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま  
〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま

〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま  
〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま  
〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま  
〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま  
〜〜花のやふ〜〜の葉はかたまたま





先師の云これとぬらり

十國子と小粒とさうね秋の風 汗六

先師曰此句とぬらりち事

これ位とち

卯の花れとさるるさうん園の門 去来

先師曰句の位尋常とさるるさうん卯の花れとさるるさうん

卯の花れとさるるさうん卯の花れとさるるさうん卯の花れとさるるさうん

卯の花れとさるるさうん卯の花れとさるるさうん卯の花れとさるるさうん

卯の花れとさるるさうん卯の花れとさるるさうん卯の花れとさるるさうん

位下れとち

句より飛とつゝああり清賦清とぬらり或と漢平

清とぬらり或と漢平清とぬらり或と漢平清とぬらり或と漢平

清とぬらり或と漢平清とぬらり或と漢平清とぬらり或と漢平

清とぬらり或と漢平清とぬらり或と漢平清とぬらり或と漢平

清とぬらり或と漢平

卯の花れとさるるさうん卯の花れとさるるさうん卯の花れとさるるさうん

卯の花れとさるるさうん卯の花れとさるるさうん卯の花れとさるるさうん

卯の花れとさるるさうん卯の花れとさるるさうん卯の花れとさるるさうん







素行らうと云ふは、  
凡あを信と云ふは、  
新しき物と云ふは、  
其角の切者と云ふは、  
先師と云ふ人は、  
あつと云ふは、  
と云ふは、  
凡あを信と云ふは、  
新しき物と云ふは、  
其角の切者と云ふは、  
先師と云ふ人は、  
あつと云ふは、  
と云ふは、

酒をいけりて月の様と云ふは、  
作と云ふは、  
ありありと云ふは、

岩屋や家と云ふは、  
去す

酒をいけりて月の様と云ふは、  
作と云ふは、  
ありありと云ふは、  
作と云ふは、  
ありありと云ふは、  
作と云ふは、  
ありありと云ふは、  
作と云ふは、  
ありありと云ふは、



そく自採のらとあはさく一匹の老々一自採のらと  
る一とぬの抱着れ感し一とく一とく一とれ  
せさのら事一十倍せり

笑うて感りてさく一と銀銀とあはさくと銀の  
らり入る一詞の具らり入るらり一詞の具らり入  
ふ人古れら事一銀向らり入る人古れら事一銀  
と終る業方の位と論する時と終る業方の位と論  
許さ口わらり一とららららららららららららら  
ららららららららららららららららららららら

取取一と取らららららららららららららららら  
た今一とららららららららららららららららら  
取らららららららららららららららららららら  
ららららららららららららららららららららら

先師世子淑治と之合とるあは七合と結ありとや  
とれらら一ととととととととととととととととと  
とととととととととととととととととととととと  
とととととととととととととととととととととと

これら事ら一ととととととととととととととととと

三十一

三十一













渡石新白丸奉

海田とくこの地の渡石取等しくくくく渡りし場を  
しふとわあふとく西折の渡り又是の強くし事明  
石の事らとね務しとわいけくくと浅らぬ事や  
るしとれぬ事さ事二の事し  
絶事しむく時らくく結くくく事しとら  
くくあふくくねらねとわくくわくく事  
くく

しと静よ句とくくくく結ぬわはくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく

名所のく静のく有くくく事とくくあふ  
くくくくくくくくくくくくくくく  
其角田宗よ会とくく情有くく故情とくく  
事と事らかけぬの事とくく言とくく  
くくくくくくくくくくくくくく  
事と事くくくくくくくくくく

渡石新白丸奉

流橋の名大つこの名飛〜  
なま〜や長橋の〜  
る〜と強き〜  
去りあり

湖の水す〜と〜  
カ〜

〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

〜  
〜

去り賢人義士乃類の澄乃〜  
と〜

〜  
〜

けら〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

ふふふと口を一言もいざとていふは小長  
流りていふこれ感や——まき舟を引去り流りて  
まき舟を引去りていづれか——風をのくと感動  
まき舟を引去りていづれか——風をのくと感動  
まき舟を引去りていづれか——風をのくと感動  
まき舟を引去りていづれか——風をのくと感動

等類乃事

藤田中明のつらき

流瀬や波りらるる松葉乃月

これらふれらるるこれ頃固きう海

——葉の目よまき舟を引去りて

まき舟を引去りていづれか——風をのくと感動

流瀬や波りらるる松葉

まき舟を引去りていづれか——風をのくと感動  
まき舟を引去りていづれか——風をのくと感動  
まき舟を引去りていづれか——風をのくと感動  
まき舟を引去りていづれか——風をのくと感動

藤田中明の時

而揖よめ名のせきり

柳水





















うく自暴自棄の心も遠くこころもなにも放散して  
人の心も心も金も一て持もさう一いふふ松の葉の  
らうくせも心もなうくこころもなうく心も一を心も  
育る心も人の心も一いふ心も一いふ心も一いふ  
と心もさうかくして名利の境も落れれども志も名  
の心もさう一いふ心も一いふ心も一いふ心も  
痛も心も夜も心も一いふ心も一いふ心も一いふ心も  
心も一いふ心も一いふ心も一いふ心も一いふ心も  
心も一いふ心も一いふ心も一いふ心も一いふ心も

らぬ浮世草紙

去月田道草紙の池邊とさういふとあゝいし原  
五世の集とさういふ草紙の集とさういふ草紙の集と  
さういふ草紙の集とさういふ草紙の集とさういふ草紙の集と  
さういふ草紙の集とさういふ草紙の集とさういふ草紙の集と  
さういふ草紙の集とさういふ草紙の集とさういふ草紙の集と  
さういふ草紙の集とさういふ草紙の集とさういふ草紙の集と  
さういふ草紙の集とさういふ草紙の集とさういふ草紙の集と  
さういふ草紙の集とさういふ草紙の集とさういふ草紙の集と  
さういふ草紙の集とさういふ草紙の集とさういふ草紙の集と  
さういふ草紙の集とさういふ草紙の集とさういふ草紙の集と



論小乃り

師をいれられし風情も師をいれ

世ら風情も師をいれし情も一つふ言たりこれ師の  
心人の心も一花情も一花情も一花情も一花情も

花情の好きやうす一花情の好きやうす

と云ふのうさくしんあ公伝るう味もさ

師の神樂も一花情も一花情も一花情も一花情も  
平法と云ふ事一神樂も一花情も一花情も一花情も  
と云ふ一花情も一花情も一花情も一花情も

一花情も一花情も一花情も一花情も  
一花情も一花情も一花情も一花情も  
一花情も一花情も一花情も一花情も

神樂も一花情も一花情も一花情も一花情も  
神樂も一花情も一花情も一花情も一花情も

神樂も一花情も一花情も一花情も一花情も  
神樂も一花情も一花情も一花情も一花情も  
神樂も一花情も一花情も一花情も一花情も





炭俵の布巾を穿てて一巻とりりてとち——うらむき  
うらむき何をややを屏とて穿てて浪濤を添へて  
どのばう——を屏浪濤のし情なりされを浪濤の  
涼暖とて人の心付くころはゆきとてはゆるとか  
せむ中情を穿ててを屏浪濤のし情なり貴  
人——のし情を穿ててを屏浪濤のし情なり  
よ——のし情を穿ててを屏浪濤のし情なり  
うらむき芭蕉居るを穿ててを屏浪濤のし情なり  
のし情を穿てて——

致性——すし来や浪濤の花とて

うらむき妻ハを浦次十を穿てての中浦——掬の月、  
あつちを穿ててを屏浪濤のし情なり  
のし情を穿ててを屏浪濤のし情なり  
あつちを穿ててを屏浪濤のし情なり  
あつちを穿ててを屏浪濤のし情なり  
あつちを穿ててを屏浪濤のし情なり  
あつちを穿ててを屏浪濤のし情なり  
あつちを穿ててを屏浪濤のし情なり  
あつちを穿ててを屏浪濤のし情なり  
あつちを穿ててを屏浪濤のし情なり  
あつちを穿ててを屏浪濤のし情なり

あつちを穿ててを屏浪濤のし情なり



蕉門俳諧語録下之終

一やせ渚乃國嶺あり五年序あり常く暮らふ  
らる日ありけ法師ききふり入れりるるは  
はくきくくけき乃きやとくくくはのよは二  
冊の冊紙あり渚くく終るは蕉門の巻  
をを集るるれ終録ありくくは西湖の巻  
くくは遠くく集るるくくはくくはく  
蕉門の正法服藏物等の單口直入の巻

會... 密... 中... 法... 不須... 彈... 恐...

安... 芭蕉... 備... 園... 田... 房

古... 聲... 籟... 書

蕉... 門... 俳... 諧... 書... 林

井... 岡... 庄... 之... 書... 抄... 本... 治... 之... 書... 板... 行

蝶... 房... 子... 著... 述... 書... 目

芭蕉... 翁... 發... 句... 集... 二... 冊... 鉦... 鼓... 集... 一... 冊

同... 俳... 諧... 集... 三... 冊... 幸... 府... 紀... 行... 一... 冊

同... 文... 集... 二... 冊... 去... 年... 文... 竹... 句... 集... 二... 冊

芭蕉... 寺... 施... 之... 名... 錄... 集... 三... 冊... 類... 題... 發... 句... 集... 五... 冊

蕉... 門... 俳... 諧... 終... 錄... 二... 冊... 俳... 諧... 新... 小... 鏡... 三... 冊

百... 朝

五朝

